
Calendula Officinalis

森田しょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Calendarula Officinalis

【Nコード】

N2485M

【作者名】

森田しょう

【あらすじ】

隣の家には、あの子が住んでいた。たくさんの思い出が詰まっているわけじゃないけれど、そこには彼女がいたという事実だけが佇んでいる。ただ、それだけのこと。

「どうして死んじゃったの？」

あゆみは、僕の隣で泣きながらそう言った。彼女と同じように、僕もたくさんの雫を地面に落としていた。

僕が十一歳の時に、団地の中にある僕の家の隣に、家族が引越してきた。どうしてか、僕はそれがとても嫌だった。

そこには、以前まで別の家族が住んでいた。「木原」という人たちで、三人家族。その子供は僕と同じ年で、「あゆみ」という女の子だった。いつもポニーテールにっていて、物心が付いた時には一緒だったと思う。それがいつだったのかわからないけれど、彼女は僕の人生の一部には間違いなかった。お父さんやお母さんのように。

小学校のクラスは違ったけれど、登校する時と帰る時はいつも一緒だった。お互い、そうすることが必然であったかのように、その時間は一日に必要な要素であったかのように、僕たちは肩を並べて歩いていた。その頃の男女の体格なんてほとんど差異がなかったから、まさにそうだったと思う。

「たつくん。見て、猫」

いつだっただろうか。小学二年生くらいの頃だったと思う。小学校からの帰り道、いつものように下校している途中、あゆみの姿が消えた。それになかなか気付かなくて、後ろに振り返ると、道路の脇に置かれている汚れた段ボールの前にしゃがんでいる彼女の姿が

あった。その中にある「生き物」に、好奇心という視線を送りながら。

段ボールには子猫がいた。まだ目が開いていなくて、小さく震えている。

「弱ってるのかな」

彼女はそう言うと、僕に視線を向けた。既に泣きそうになっていて、それにつられて僕も悲しくなってしまった。子供の頃というのは、周囲の感情に感化されやすいように思う。

「持って帰っちゃ……ダメかな？」

僕が返答に困っていると、彼女は言った。その言葉は僕に追い打ちをかけるものでしかなく、なぜそう考えるに至ったのか、なぜ僕に訊くのかわからなかったのだ。もし僕が「いいよ」と言っても、あゆみのお父さんとお母さんが「ダメ」って言ったら絶対にダメなの。

「わかんないよ。おばさんに聞いてみれば？」

それが、僕の精一杯だった。

「でも、絶対にダメっていうもん」

「じゃあ、ダメだと思う」

「たっくんはどう思うの？」

「わかんない」

「どうして？」

立て続けにそう訊かれても、わからないものはわからない。彼女は子猫に対して母性本能が何か作用したのかもしれないが、興味のない僕にしてみればどうでもいいことではなかった。

「わかんないものはわかんないよ」

「……………」

それ以上、彼女は何も言わなかった。僕を見るのを止め、再び子猫を見始める。

それから数十分も、彼女は子猫を見続けていた。なぜか僕はその場から動くことができなくて、言葉を発することさえもできなくて、

苦しくなっていた。子供ながらに、離れてはいけないというのがわかっていたのだ。自分で自覚していないのにもかかわらず。

「ちよつとくらいならいいよね」

彼女は段ボールを持ち、立ち上がった。突然の発言と行動。その二つに驚く僕に顔を向け、彼女は言った。

「決めたから」

屈託のない笑顔で。今まで見てきた表情　笑顔とはまた違うものに見えた。僕はそれを美しいとか、何よりもかわいいとか思ったりはしなかった。その笑顔の中に、なんだか……悲しんでいるようなものが含まれていたからだ。

笑顔であつてそうでない。だから彼女も自分の悲しかった。だけど、一言で表すのならば　勇ましかった。そう思った。

その日、あゆみは公園の茂みに近いベンチの下に子猫の入った段ボールを運んだ。家に持って帰ってもすぐにはれるとわかっていたし、他に持っていく場所がないのだ。

「ねえ、たつくん。どうして元気がないのかな？」

ほとんど鳴かない子猫を心配そうに見つめながら、彼女は小さく言った。

「お腹が空いてるからだと思うよ」

知識に乏しい子供の僕には、そんな答えしか絞りだせない。それでも、彼女の力になればと思った。子猫がどうなるうと関係なく。

「じゃあ、ミルクがいるのかな？」

「たぶん」

「ねえ、お小遣いとかある？」

あゆみはこつちに顔を向ける。少しだけ、明るくなっていた。同時に、ホツとする自分がいた。

「少しだけなら」

「じゃあ、一緒に買いに行こ」

僕は「うん」とうなずき、コンビニへ向かった。嫌とも言えなか

つたし、それで気が済むのなら　とも思っていたから。

コンビニで牛乳を買って、子猫に与えて、雨風が凌げるように段ボールの上にタオルをかけてあげて、その日は家に帰った。

翌日の朝、小学校へ向かう途中、あゆみと一緒に子猫の様子を見に行った。タオルを外して見ると、そこには既に「生き物」などいなかった。

身体が固まるというのは、ああいった状況でなるものなのだろう。瞬きするのさえ、その仕方を忘れてしまったかのようにしていなかった。

僕とあゆみは子猫の亡骸を親に見つからないように彼女の自宅へ持ち帰り、庭の隅っこに埋めてあげた。寝るべく深く、深く。黙々と小さなスコップで掘る僕には、悲しいとか、かわいそうとか、そういう感情はなかった。まだ実感が湧いていないのと、愛着がなかったから。

土を埋め終わった後、彼女は何も言わずに庭の物置へ行き、そこから何かを持って来た。

「それ、何？」

そう訊いても、彼女は何も言わない。無言のまま、それを埋めた辺りに置いた。何かの種だろうと、俺は思った。

「ねえ、たっくん」

昨日と同じように、彼女はしゃがんでいて、埋めた場所を見つめている。

「どうして死んじゃったのかな」

わからない　とは言えなかった。はっきりとした答えがないというのもあったし、何を言っても彼女は悲しんでしまふと思った。

「私が悪かったのかな」

「あゆみは悪くないよ。悪いのは、捨てた人だよ」

「でも、私が余計なことをしないほうがよかつたんだ」

「そんなことないよ」

そう言って顔を振ると、彼女は僕に顔を向けた。

「どうしてそう思うの？」

その言葉と同時に、彼女の双眸が潤んでいるのがわかった。溢れんばかりに、彼女の気持ちがある所に集約している。それに驚き、慌ててしまった僕は「あゆみは悪くない」としか言えなかった。

「私のせいだよ。私のせいで、死んじゃったんだ」

そう言いながら、彼女は泣き始めた。声を押し殺しながらも、彼女のきつく閉じたまぶたから涙は溢れ出てきて、埋めた場所に落ちていく。何度も何度も。

僕はその姿を見て 死んでしまった事実には関係なく、同じように涙を流し始めてしまった。

悲しいのかな。……わかんない。

寂しいのかな？ ……わかんない。

子供ながらに、そんなことを考えていた。それなりに冷静だったのかもしれないが、涙はなかなか止まってはくれなかった。寧ろ、彼女よりも自分の方が泣いていたと思う。

「たっくん、泣かないで」

彼女はそう言って、僕に笑顔を向けた。

くしゃくしゃの笑顔。涙の雫が滴り落ちているのに、僕よりも苦しいはずなのに、どうして笑顔になれるのだろう。

それが強さなのだと言うならば、それを持っていない自分が情けなかった。自分が彼女を護ってあげなければならなかったのに。

護らなければ、いけなかったのに。

十歳になる年の春。短い春休み。世間では桜の訪れとともに新しい生活を始める人たちや、門出を祝う人たちで溢れていた。春の香

りには、ほのかに出逢いの予感を感じさせていて、見えもしない未来に希望が詰め込まれているのだと錯覚してしまう。

「お別れだね」

急だった。本当に。

あゆみたちは、別の町へと引越すことになったのだ。関西の方だったと思うけれど……行こうと思えば行けるけれど、どうしてもその時はとてつもなく遠い国のように感じ、彼女たちが見知らぬ世界に行ってしまうような感覚に囚われた。九だったからそう思ったのかもしれないが、絶望感に近いものではあった。だって、僕はあゆみのことが好きだったから。その感情が、どうしようもないほど僕の心を占めていたのだということに気付いた頃だったから。

四月の初め。その日は風の中に微かに冷気が入り込んでいて、三月を思い起こさせる大気だった。それでも、青い空は淡く霞んでいて、春独特の風景を創り上げていた。僕もあゆみも、それが大好きだった。

お別れのあいさつということ、あゆみは僕の家のお玄関にやってきていた。開かれたままのドアの向こうには、彼女の両親が僕たちを一礼していた。

「今日、行くんだ」

ニコリと、あゆみは微笑んだ。その顔が妙に僕の心に刃を突き立てる。ズキズキと痛んだ気がした。

「遠いから、もう会えないかも」

僕は苦笑を浮かべながら、「そうなんだ」と頷くことしかできなかった。別れるというのに、彼女は平気そうな顔で言うものだから、自分の感情とは対照的なもののような感じがしたのだ。だからか、すぐに腹立たしくなってきた、同時に悔しいとさえ思い始めていた。

彼女は、自分とは違うのか。自分は培ってきたもの全てが崩れるほど悲しくて、彼女の笑顔と艶やかな髪や桃色の頬を見つめることのできない寂しさが混在し、涙腺が壊れてしまいそうなのに。滝のようにそれらが溢れるのを抑えているのは、きつと悔しいからだ。

「でも、会いに来るね」

えっ　と、僕は顔を上げた。その時にようやく、自分は俯いていたことに気が付いた。

「私、たつくんのが好きだから」

思考が止まったのは、あの時だけだったと思う。それまでいろいろなことが駆け巡っていたのに、その言葉でそれらが動くのを一斉に止め、ポーズをとったまま固まってしまったのだ。

「いつかまた、会いに来るからね」

じゃあね。バイバイ。

僕の言葉を待たずに、彼女は行ってしまった。彼女たちを乗せた車が発した後に残ったのは、車の排気ガスのおいと、あゆみが住んでいた家と、あゆみが伝えてくれた想いだけ。

嬉しいのと寂しいのと………よくわからなかった。もっとたくさんさんの想いがあるのだけれど、それが明確に示すことはできなかった。

でもとにかく。僕はまだ希望を持っていいのだということはいわかった。彼女にまた会えるのだという「未来」が、どこかにある。だったら、今はもういいのかもしれない。それだけで、今を生きられるのだから。

それから一年後の春、あゆみが住んでいた家に別の家族が移り住んできた。その子供は二人いて、どちらも僕より年下で、同じ小学校だった。

僕はそれがたまらなく嫌だった。彼女が住んでいた場所に、彼女が息衝いている唯一の場所に、他人が入り込んでほしくない。そこを汚してほしくない。そこは、彼女の心が根付いているはずなのに、もう遠くへと旅立ったあゆみ。一年前は会うことができると思っていたけれど、すぐに会うことはできないのだと知った。世界なんでものは残酷だし、やっぱり未来なんて最初から定められているのだ。あるべくしてある。所詮そんなもの。

「ここに、花を植えようよ」

猫が死んだ次の日、僕は彼女にそう提案した。やはり彼女は沈んでいて、僕なりにどうにかしたくて、そんなことを言ったのだ。彼女が好きだと言っていた花を植えて、それが花を咲かせば、彼女も笑顔になってくれる。

「うん」

彼女は太陽のような笑顔を見せてくれた。僕はそれを見るだけで満足できていた。これからずっと、そうでありたい。そう思っていた。

二階の僕の部屋からは、あの花　　マリーゴールドを見ることが出来る。あゆみたちがいなくなっても、あれは咲いていた。庭の隅

つこに咲いているそれは、黄金のような輝きを放ち、いつかの悲しみは薄れているようにも感じた。

もう、彼女には会えない。彼女は帰ってこない。なのに、あの花は咲いている。いつもいつも。

「たくさん咲けばいいけど」

「大丈夫だよ。ちゃんとしておけば、ちゃんと咲いてくれるよ」

そう言つと、あゆみは笑顔になった。桃色の頬といつものポニーテール。それらは、僕に幸福を与えてくれる絵だった。

「たっくん。ありがとう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2485m/>

Calendula Officinalis

2010年10月8日14時32分発行